

## 地獄の底をはいまわった四年半

### はじめに

人生の中でいちばんはつらつとして楽しいはずの二十代。でも、わたしの二十代は、兵隊として戦場におかれた四年間と、その後、ソ連軍に捕らえられてつらい労働をさせられた四年半で終わってしまいました。

わたしも、もうすぐ八十歳さいになります。

平和の尊よとさを次の世代の人たちに伝えること。これは、われわれ戦争で生き残った者たちがどうしてもやらなければならないことなのです。

そう考えて、わたしは自分の体験をありのまま語ろうと決心したのです。

### ※まんしゅう 満州での終戦

昭和二十年八月十三日、わたしたちの部隊は、支那(中国)から満州鉄道の本線にある四平街⑦という所に着きました。

ここで見た光景は、まるで地獄じごくのようでした。

⑧ 新京(長春)や、ハルビン方面の国境地帯から、屋根のない貨車こどもがつきつきに到着とうちやくします。そこには、ぎゆうぎゆうづめにされた女の人たちや子供たちがげっそりとやつれた顔で乗っていました。

ソ連兵がどんどん攻せめてきます。

町じゅうで満州人たちが暴あばれまわっています。今まで日本におさえつけられていたうらみを晴らすつもりなのか、そこここで物をうばい、火をつけているのです。

※満州……現在の中国東北部

もう、われわれの力ではおさえきれません。

「戦争は、負けたいらしい」

将校※しやうこうがわたしにそつといいました。

そんなバカなことがあるもんか。わたしは信じませんでした。

しかし、八月十五日の昼過ぎ、部隊は奉天⑩ほうてん（瀋陽しんよう）に到着とうちやく、ここで、日本が戦争に負けたことをはつきり知らされたのです。

シヨックでなみだも出ませんでした。

やがて時間がたち、だんだん落ち着いてくると、こんどは喜びがわきあがってきました。

これで日本に帰れる。親兄弟の顔が見られるんだ。

みんなの顔も、かがやいて見えました。

奉天ほうてんには、戦場からどんどん部隊が集まってきました。

わたしは、通信部隊の分隊の長だったので、それぞれの部隊との連絡れんらくをとらなけ

ればなりません。いそがしい毎日になりました。

ある日のことです。

わたしたちは、五十キロメートル先まで、通信用の線をしくために出かけました。ひとつ作業を終え、次の場所に行く途中のことです。突然、武器を持った十五、六人の満軍兵におそわれました。

衣服、下着、それにわたしが背負っていた軍刀までとられてしまいました。

「軍刀は武士のたましいだ。これだけは何とかとりかえさねば」と思い、とつさにこういったのです。

「向こうにはまだまだたくさん品の品物があるから待っておれ」

相手の気がゆるんだすきに、かくし持っていた銃を出して撃ちました。激しい銃の撃ち合いになりました。

※将校……45ページの注を参照

※満軍兵……満州軍の兵隊

敵は逃げ、わたしたちは追います。

わたしは、軍刀をとりかえし、ふりまわしながら追いかけました。たおれた敵兵のど元を軍刀でつきさしました。

敵は二人死に、あとは逃げました。

この事件は、これ以上くわしく語ることはできません。

ただいえることは、人間は、このような時には我を忘れ、にわとりや犬ねこを殺すのと変わりなく、簡単に人も殺してしまうということです。

まったく、気がくるってしまうのです。

何とおそろしいことでしょう。

### シベリア強制労働

わたしたち千五百人の日本人は、ソ連軍に捕らえられ、北へ北へと移動させられました。

「もうすぐダモイ（帰国）だぞ」

などと、だまされだまされして、ソ連邦カザフスタン共和国カラガンダ市の近くに  
着いたのは、十一月初めの早朝でした。

ここは、ソ連でも指おりの炭坑の町ですが、一年の半分が、マイナス数十度にも  
なる、ものすごく寒い所なのです。

日本では今ごろはまだ秋。けれど、ここではこおった湖の上をトラックが走って  
います。

わたしたちは、この収容所で、採石と道路建設の作業をさせられることになり  
ました。

昭和二十年（一九四五年）の冬は、今まで経験したことのない厳しい寒さと飢え  
と栄養失調、それに作業中の事故によってたくさんの日本人が死にました。

毎日、生きのびられるのか、それとも故郷に帰れないまま、ここで死んでしま  
うのか、ぎりぎりに追いつめられた日が続きました。

「昔から、鉄のカーテンのソビエトにはいった者はいても、出てきたものは一人もいない」

と、いわれてきました。

わたしたちは、これからいったいどうなるのか、まるでわかりません。

正義せいぎはかならず勝つ。

わたしはかたく信じてきました。でも、こんなうそつきのひどい国に負けるなんて……。神ほとけも仏ぼとけも信じられなくなりました。

「よし、この地で雑草ざっそうとなっても徹底的てつていできに反抗はんこうしてやるぞ。どうせ、おれは農家の三男坊さんなんぼうだ」

気の強い男まさりの母は、わたしが戦地に行く時、

「お前はお国のために死んでこい。骨ほねはおつかあが拾ひろってやる」

と、いって、なみだ一つ見せませんでした。わたしがソ連に捕とらえられたことを知ったら、さぞなげくことでしょう。

よし。おれはソ連のためになんか働くもんか。第一、にわとりに食わすようなえさだけで働けだなんてむちやくちやだ。

わたしはこう心に決めて、徹底的てつていてきに仕事をさぼりました。

「ぶっぱなすぞ！」

ソ連兵がおこって、銃口じゆうこうをわたしの鼻先につきつけ、引き金をガチャガチャさせました。

でも、そんなおどしなんかには負けません。

その上、わたしは小隊長代理だったため、わたしがさぼると兵隊たちもいっしょにさぼるようになりました。わたしたちの小隊のノルマはさっぱり上がりません。

働かざる者食うべからず。

ソ連当局は、圧力あつりょくをかけてきます。

## 地獄じごくの炭坑たんこう行き



反抗はんこうしつづけてきたわたしに、とうとうつけが回ってきました。

翌年よくとしの夏の初めのことです。

收容所しゅうようじょにいる千五百人の中から、二十数人が炭坑たんこう行きを命じられました。だれもがおそれている炭坑たんこうへ。

選ひび出されたのは、やくざ者や親分子分など、みな、一筋縄ひとすじなわではいかなない悪たればかり。わたしの属ぞくする中隊からはわたしと親友のY軍曹ぎんそうの二人でした。

一年足らずの地上の労働から、三年半のつらい炭坑夫たんこうふの生活に回されたのです。

カラガンダには、数十の炭坑たんこうがあり、そのころ、十万人以上の日本人が働かされてきたようです。

坑内こうないには、一日のうち、朝、夕、深夜の三交代で入ります。手さげランプを持って、真まつ暗闇くらやみの穴あなの中を二キロメートルもくだって、やっと現場げんばに着きます。

爆破ばくはさせた石炭をスコップでワゴン車に積む作業、終点で重たいワゴン車をレール

※軍曹ぎんそう……兵隊の階級かいきゅうの一つ

ルに乗せたりおろしたりする作業。どちらも体力のいるきつい労働でした。

わたしは、やけくそになっていました。

「望みも何もない。もう、どうにでもなれ」と、思っていました。

日本人の仲間ともロシア人とも、しょっちゅうけんかをしました。

ソ連の現場監督げんば かんたくキリイシとのことも忘れられませんか。

キリイシは、いつもまさかりと、のこぎりを持って見回っていました。

わたしはその日、体の調子が悪く、働くのがおつくうでした。けれど、さぼるわけにもいかず、仕方なくいつものように流しコンベアに石炭を積んでいました。

すると、いきなりコンベアが止まりました。こんなことが、時々あるのです。コンベアが止まれば、作業はストップです。

やった。少し休めるぞ。

わたしは、その場にべたりと座りこんで、うとうとねむったようです。

再びふたたびコンベアが動きだしました。

「ソルダート（兵士）起きろ！」

キリイシが大声でどなりながら、わたしの足もとをけり上げました。

腹はらがにえくりかえりましたが、ぐつと歯をくいしばって我慢がまんしました。わたしは、

だまって石炭をコンベアに積みはじめました。

「早くしろ！」

今度は、背中せなかをこづきました。

もう、堪忍袋かんにんぶくろの緒おが切れました。

わたしは、ランプをキリイシのすね目がけて、たたきつけました。キリイシは、

そのランプを拾うと、わたしにおそいかかってきました。

わたしの右まゆのあたりが切れ、顔は血だらけ。なぐり合い、取っ組み合いが三

十分も続きました。分隊の連中が、ようやくわたしたちをひきはなし、ロシア人も

周りに集まってきました。

「処罰しよばつだ！ 処罰しよばつだ！」

キリイシが興奮こうふんしてさげんんでいます。

ああ、これでおれも牢獄ろうごく入りだな。

わたしは観念くわんねんしました。

その晩ばん、分隊ぶんたいの会報板かいほうばんに、こう書かれました。

「ロシア人には絶対ぜったい手出ししてはならない。当然当然、強制労働きょうせいろうどや食物での仕返しがある。ロシア人の感情かんじょうを悪くすることは厳まじしく禁きんずる」

どういうわけか、わたしに対する処分しよぶんは何もありませんでした。わたしが大けがをしたためなのか、理由はよくわかりません。

しかし、ブラックリストに、何と書かれたのか。——これが、わたしのダモイダモイ（帰国けいこく）をおくらせる原因げんいんになったことはたしかです。

### ダモイ（帰国）への夢ゆめ

強制労働きょうせいろうどさせられた日本人も、二年半を過ぎたころから少しずつ帰国けいこくさせられ

はじめました。

親友のY君の帰国が決まりました。

Y君は、坑内の落盤事故で生きうめになり、大けがをしたのです。命は助かったものの足が不自由になってしまいました。

「あまり無理するなよ。一足先に帰って、家族にもよく伝えておくからな。くれぐれも体を大事に。——では、次は日本で会おう」

Y君は、わたしのかたを強くだきしめました。

四度目の厳しく寒い冬がやってきました。もう、半分以上の日本人が帰ってしまいました。

たった一人の親友も去り、遠い異国にとり残されたわたし。何度、なみだを流したかれません。

そして、とうとう五年目の冬をむかえました。この広い炭坑にも日本人の姿は少

※落盤……炭坑の天井や壁がくずれ落ちること

ししか見られなくなりました。

夜中、作業を終えて外に出ました。こおりつくような夜空に満月がかがやいています。

ああ、おつかあ、気の強いおつかあでもこれ以上の苦しみにたえられるだろうか。つらい毎日が過ぎていきます。

そんなある日のこと、昭和二十四年も終わろうとしていた時です。

炭坑たんこうが閉じられることになったのです。

ついに待ちわびた日が来ました。

日本に帰れるんだ！

わたしたちは貨車に乗せられ、シベリア鉄道でシベリアを横断おうだんし、ナホトカ港ナホトカに着きました。

けれど、船を待つ一週間が、また大変でした。

何回も集められ、ソ連に対して反抗的な考えを持つていないかをチェックされるのです。

少しでもひっかかれば、またソ連の奥地へ送りかえされてしまいます。待ちに待った船が来て、やっと乗船が始まりました。

栈橋をわたる前で名前を呼ばれます。一列に並んで順番を待ちました。何百何十番目かに、やっとわたしの名前が呼ばれました。

前に出て栈橋を渡ろうとした時です。

「待て！ お前は後だ」

一人の将校がぐつとわたしを引き止め、わたしは引きかえさせられました。

他の仲間たちは栈橋を渡り、どんどん船に乗りこんでいきます。残ったのはわたしだけです。

その時のわたしの気持ちは、とうていわかってもらえないでしょう。

将校連中が書類をめぐって話し合っています。

わたしは、ただただ祈ってじっと待ちました。

「よし！」

やっと許しが出た時は、胸がドキドキ鳴っていました。

わたしは、また、ストップがかからないかと、逃げるように船に走りこみました。船に一歩足をふみ入れた時の感動は忘れられません。

白衣を着た看護婦さん、医師、船員たち、みなが温かく出むかえてくれました。

ああ、この人たちはまちがいなく日本人なのだ。こんどこそ、わたしをふるさと日本へ連れ帰ってくれるのだ。

なみだがあとからあとからあふれてきて、先が見えなくなりました。

(原作 前多義雄「私のシベリア抑留 地獄の底を這い回った四年半」)